

民俗博物館だより

Vol. XVIII No. 1

1992. 3. 31



▲吉野郡川上村白屋の景観

目 次

「吉野のくらし」展によせて 収藏品展「吉野のくらし」	1
吉野郡 下市の町場の性格(1)	2
黒 滝 袴	5
盂蘭盆における客棚習俗について	6
民俗資料聞き書き短信	
⑩茅葺屋根とその伝承(1)	9
お知らせ	11

収 蔵 品 展「吉 野 の く ら し」

〔期間〕 平成4年1月5日から8月30日まで

1. 〔展示要旨〕

奈良県の南部、約6割の面積を占める吉野郡は、日本の代表的な山村の一つである。単に山村という地域史の域にとどまらず、近畿という歴史を培ってきた地域の延長線上で考えてみなければならない山村である。

吉野地方は紀伊半島の中央部で、険しい山間地で拡大な面積を有する。この地では、中世期から近世にかけての「杉山売買文書」が存在する。この頃から近畿において吉野の木材が注目され、活用が場と与えられるようになったのである。これに伴い、吉野の山村のくらしも大きく変貌をとげたように見受けられる。このような、先進的な山村を考えてみることは大切なことであると思う。しかし、まだこの地方の歴史の総体は不明なことが多く、今後の課題が多い。それは、この地方のことを考える時のよりどころとなる資料がきわめて少ないことによっている。今回の展示では、当博物館で、吉野地方から収集した民俗資料を紹介することにした。これらの民俗資料は、吉野の山村を考えるための基礎的な資料であると信じる。今後、この地方を知る上に欠かすことのできない民俗資料を、継続的に収集してゆく目安ともなろう。また、この地方への調査により、資料の充実に結びつくことも念じている。今回の展示で紹介している主要なものは次の通りである。



▲木と民俗のコーナー

木と吉野の人々との結び付きから生まれた木製品。その木製品を作るための木を加工する職人の道具。畑作を中心としたくらしの道具等である。今まであまり語られることのない側面であるが、吉野の山村を考えるための一里塚になればと願っている。

今後、まだまだ体系立ててみなければならないが、この山村に興味を持たれる方々にとって、吉野の山村とは何かを考える場となることを願っているのである。

2. 〔展示内容〕

(1) 木と民俗（導入）

かつての生活用具は、木製品が多かった。

(2) 木を加工する職人

吉野郡内で居た木を加工する職人達の用具を紹介。

イ 木地屋（椀・盆づくり）

ロ 杓子づくり

ハ 曲物づくり

ニ 桶づくり

ホ 樽丸づくり

(3) 吉野のくらし

山村のくらしの基本となる生活資料を紹介。

イ 畑作

ロ 衣・食

ハ 社会とまつり



▲木地屋（椀・盆づくり）のコーナー

吉野郡 下市の町場の性格 (1)

浦 西 勉

奈良県吉野郡は紀伊半島の中央部を占める広大な地域である。その内に3町10村が存在する。また、吉野郡はほとんどが山岳地帯であり、その谷間に川が流れている。水系で見れば、十津川・北山川は南へ流れ熊野川へ、吉野川は北流し、吉野町新子で流れを西に卡えて和歌山へ流れる。この水系によって、この地方の文化にそれぞれの特徴が見受けられる。ここに住む人々の集落は、雄大な山の中腹の斜面に人家がへばりつくように点在する。いわゆる山村と名付けて良い集落である。吉野郡内でこのような山村と呼ばれる集落は298ヶ村ある(大淀町・吉野町の一部など、山村と少々異なるが今吉野郡内であるから数に入れておく)。

この山村である集落の周辺に、町場と呼ぶでしかるべき地が存在する。例えば、吉野川流域は橋本・高野山・五條・下市・上市・吉野山・新子などの町場が、そして、十津川・北山においては新宮・木本・田辺がそれにあたる。それぞれ、大きな山岳地帯の周辺に位置する町場はどのような意味が存在するのか。

いうまでもなく、人々が生活する要として、この町場は重要な意味が存在すると思われる。山村の周辺の町場の意味はどのようなものであろうか。また、注意しておきたいのは、その町場の性格がある程度説明できれば、なお、その地域の状況の理解をたやすくさせるものであろう。今、上のような問題について若干考えたことを述べてみようと思う。

今、ここで取り上げようと思う町場は、吉野郡下市町下市の町である。先の特別展示『吉野の山村と伝承文化』図録の中の「浄土真宗の吉野における発達と山村の関係」のところで、この下市の町場の発達を述べた。そのことを、もう少しここでは詳しく報告しようと思うのである。

今日の下市の町は、秋野川と吉野川との合流する秋野川沿いに発達した町場である。秋野川下流の本町・新町の町場と、少し上流の惣上・寺内町を中心とした町場との二つの大

きな町場の存在が認められる。そして、前者の方はおそらく江戸時代に発達し、後者がそれ以前から成立した町場のように考える。今から少し前の明治15年頃は、戸数744戸、人口3,094人の大きな町場であった。この下市は、その南に位置する黒滝村・天川村・大塔村・西吉野村などの扇の要としての町場と考えられる。

(1)

最初にいったい、この下市がいつ頃、町場として成立したのであろうか。これについて、『大和志料』には「吉野旧事記」を引用して次のごとく記されている。

「伝エテ言ウ。秋津ノ里 御料郷ニアリ。今ハ下市ト号ス。イワユル 永禄年中ニ初テ市ト成ル。但シ下ノ市トハ、マタ二里川上ニ上市村ガ有リ。川下ノタメラモツテ世人下市ト名ヅケテ言ウ。」

これによると、永禄年間(1558~1569)に下市が成立したという。しかし、今日永禄年間に下市が成立したというのは取りがたい。この永禄の成立の下市は、徳川幕府が町場として認めた時代と解すれば良いと思うが、下市が町場として発達するのはもう少し前までたどることができる。ではいつ頃か。それには永島福太郎氏及び秋永政孝氏が指摘している論文がある^{註①}。明確に、いつの時期かは不明であるが、おそらく下市という地名が文献に初めて現われる願行寺に残る掛図(方便法身尊像)に、明応6年(1497)の重要な年号が浮かび上がってくる。この資料の年号の頃に町場化したのかどうかの検討が必要である。しかし、一応この頃に願行寺(浄土真宗)が中心となり、町場化(寺内町)していったことが認められる。まず最初に、願行寺を中心とした寺内町がいつ頃から成立したのかを検討しておこうと思う。それは、浄土真宗第八世蓮如が吉野にやってきたことに大きな関係を見いだす。

江戸時代に編纂された『蓮如上人縁起』第2巻に次の記録がある。

御自筆ノ記ニ云。応仁二年孟冬仲旬ノ頃ヨリ。

江州志賀郡大津辺ヨリ忍出。紀伊国高野山一
見ノツイデニ。和州吉野ノ奥。十津河ノナガ
セ 鬼が城トイシ処へ。ユキ侍リシトキ。ア
マリニ道スガラ難所ナリシ間。悲シカリシホ
ドニ。カクツ、ケ侍シ也

(歌略ス)

十津河ヨリ小田井ノ道ニテ

(和歌略ス)

下淵ヨリ河ツラノ道ニテ

三吉野ノ河ツラツバクイ、ガイノ。イモセ
ノ山ハチカクコソミル。河ツラヨリ吉野蔵
王堂一見ノ時。一年ノウカリシコトヲ今思
出テ。

応仁2年に蓮如が吉野、下淵にやってきて
いる。この下淵は、おそらく今の下市の町で
あろうと考える。蓮如が吉野にやってきた理
由の解釈について、宮崎円尊氏「蓮如の吉野
の旅」^{註②}に、なぜこの地に行ったのかについて
不明としながら、おそらく浄土真宗ゆかりの
地を訪ね歩いたと推定する。確かに蓮如が訪
ねたこの地には、すでに浄土真宗の布教で根
付いたグループの存在がある。例えば、下市
町善城の滝上寺、西吉野村陰地の円光寺など
の寺院である。しかし、これらの寺院は蓮如
の考えと同じというわけではなく、少々その
信仰に対して異同があったと思われる。そう
いう土地を訪ねたのであった。そこには、こ
の宗派の立て直しをするための意味があった。
その結果、この地ではその副産物として町場
の成立をみたと考えるのである。であるから
応仁2年(1468)頃から徐々に町場化し始め
ていたとみるのである。それは、蓮如がやっ
てきておそらくその遺品として考えられる重
要な資料によって読み取ることができる。

その一つは文明2年(1470)の銘文を持つ
方便法身尊像である。そこには次のように記



▲願行寺(下市町下市寺内)

されている。

奉修覆方便法身尊形

大谷本願寺釈蓮如(花押)

文明二歳庚寅二月十二日

和州吉野郡下淵円慶門徒

同郡十津川野長瀬鍛冶屋道場本尊也

願主 釈浄妙

これは蓮如が吉野にやってきて3年後に修
復をしたものである。明らかに、当時鍛冶屋
道場の本尊として浄妙の存在、下淵の円慶の
存在のあるグループが確認されよう。「十津
川野長瀬」とは、今の太塔村引土あたりであ
る。下淵については、今の太淀町にその名は
あるが、この場合下市の千石橋付近の呼び名^{註②}
ではないかと思う。先の宮崎円尊氏の論文に
よると下市の立興寺に残る掛図に次のものが
ある。

大[]聖人

釈蓮如(花押)

文明七年乙未九月廿八日

和州吉野郡

釈円[](慶カ)

これも蓮如がその時修復したものと推定で
きる。そして、その円慶はおそらく下淵の円
慶と同一人物であろう。

このように吉野の山奥と下市との関係を深
めていくのである。特に「鍛冶屋道場本尊也」
という意味を吟味しなければならない。そし
て、その後の願行寺を中心とし立興寺・滝上



方便法身尊像(裏面銘)奉修覆方便法身尊
(電谷大学図書館蔵)

大谷本願寺釈蓮如
文明二歳庚寅二月十二日
和州吉野郡下淵円慶門徒
同郡十津川野長瀬鍛冶屋
道場本尊也 願主釈浄妙

寺・宮前寺などが、有力な蓮如の息のかかった真宗寺院化していったのであろうと想像する。

このことにおいて町場化したという理由にはならないが、もう一つの理由に、次のことが考えられる。それは蓮如がその時にいた滋賀県の堅田とはどのような土地であったのだろうか。また、その寺院である本福寺の法住とはどのような考えの持ち主であったのだろうか。それは次に示す『本福寺跡書』に月々の当番が記載されており、その職業は商人・職人が多かったことに気がつく。

本福寺毎年十二ヶ月之念仏御頭之事

正月十八日	法住(紺屋)ノ弟 法西	二月十八日	トギヤ(研屋) 道門
三月十八日	ナカムラ(船乗) 唯寛	四月十八日	アブラヤ(油屋) 法覚二郎兵衛入道
五月十八日	与五郎左衛門	六月十八日	イマカタウシアミノダウジョウ 善法小五郎兵衛入道
七月十八日	セドノダウチャウ 法覚	八月十八日	マノイマジユク(鍛冶屋) 慶了衛門五郎兵衛入道
九月十八日	和爾宿明善 (桶屋)	拾月十八日	カウジヤ(麴屋) 太郎衛門
			アブラヤ(油屋) 又四郎衛門
十一月十八日	大北兵衛	十二月十八日	ニシウラ(桶屋) 弥助 ニシウラ(船大工) 藤兵衛

しかも、その人々の一つの思考形態として
田作ニマサル重イ手ハナシ。鍛冶屋ハ飢年ニ釜・
鉈・金金ヲヤスヤスト売ルヲ買留メ、鋤・鍬・
鎌・鉈ニシテ、有得ナル人ニ売ルゾ。鎌ハ月々
ニ使ヒ失ウテ流行ルゾ。又桶師ハ年々ニ桶ノ側
腐リテ、年辛ケレドモ、流行ライデハ叶ハヌモ
ノゾ。又研屋モ、年辛ケレバ、ヨキ刀ヲヤスヤ
スト売ルヲ仕直シ、有得ナル人ニ売ルゾ。又番
匠モ年ノ辛イ時、有得ノ人造作ヲ流行ラスル。
万ノモノヲ詠ユルハ、分限者ナリ。又塩・瓜・
米・豆・麦ナドヲ売ル人、万ノ果物、餅・粽・
団子・焼餅・万食物ヲシテ売ルモノハ、悲シキ
年、餓エ死ナヌモノゾヤ。万商物モ、檀那ニ、有
徳人ヲ持ツハヨキ便リナリ。

このような信者のグループの真只中にいた蓮如は、やはり吉野下市にやってきた時にも何らかの影響があったと考えざるをえない。それは商業・職人的であるという側面である。

応仁2年に蓮如が下市にやってきて、その影響を与えたことは右の通りであるが、それ以後も影響を与え続けている。文明7・8年

(1475・6)頃にも吉野にやってきていることなどは、下市町才谷の楠山家に蔵される法名授与の記録によって知る。また、吉野町飯貝の本善寺に蔵する蓮如の「御文章」によって知る。そして、次に文明11年(1479)から12・13年と吉野の木材が、京都山科まで運搬する記録が現われる。

この時代の流れは、下市を大きな町場へと変化したものと想像してゆくのである。この延長線上に先の願行寺の本尊というべき方便法身尊像が存在する。

蓮如が没して、大阪石山本願寺がこの宗派の拠点となるが、おそらく、吉野川・紀ノ川づたいに関連を持ち続けたのであろう。町場として成立したその場所は惣上・寺内・田中を中心とした付近であろうと思う。

このことが、天文元年(1532)・天文5・6年(1536・1537)頃まで続く。天文初期までにはすでにかんりの規模の町場が完成していたと思われる。天文元年頃から3年にかけて奈良・吉野において一向一揆が発生している。これにより、下市の町がかなり打撃を受けたと思われる。天文5・6年の『石山本願寺日記』の中に、当時、願行寺の住職勝林坊が吉野下市に戻ることを嘆願している記録がある。そして、やっと天文6年に下市に戻っている。つまり、この一向一揆により下市・上市が興福寺及び大和武士に焼かれたため、大阪石山本願寺でいたためである。逆にみれば、焼かれる程町場化していたのである。

今、上にみた通り下市の町は応仁2年から天文4・5年までの約50年間の間、徐々に町場として成立していたのである。

蛇足であるが、天文5年から天正5年(1577)までの約40年間は下市が再び町場として完成している。これは応仁から50年の初期寺内町と、天文から40年の明確な寺内町との違いはあるが、願行寺を中心とする寺内町という性格の基本はかわらない。天文に一度焼かれ、次に町を復興し、天正5年に再び筒井順慶に焼き払われてから下市の町は次の時代へ入ってゆく。(以下、次号)

註①永島福太郎氏「一向宗の吉野流布」(『下市町史』所収)及び「在郷町、下市・上市の発達」(『奈良県総合文化調査報告書』所収)と、秋山政孝氏「真宗の吉野進出と上市の成立」(『吉野町史』上巻所収)及び「真宗吉野教団の成立とその活躍」(『紀要 奈良文化女子短期大学2号』所収)がある。この本文もこれらに負うところが多い。
註②『宮崎門尊著作集第5巻』所収

黒 滝 袴

徳田 陽子

吉野川の支流、丹生川の最上流に位置する黒滝村は山村である。昭和初め頃の主な仕事は、男は山仕事、女は山の産物の運搬や畑作などであった。

仕事着は、男はシャツ、六尺フンドシの上から紺バンチャ（紺のテッポウ）を着てハカマをはき、細い帯をしめた。細い帯は道具をさすのに便利であった。女はジュバン、オコシの上からハンチャを着てハカマをはき、半幅帯をしめた。半幅帯は有り合わせの木綿布で5～6尺の長さに作る。ハカマの上から二重に回してキッチャ結びにする。家の中でもハカマをはいたが、「ハカマをはかんと出られん」といって、女も外出するときにハカマをはいてでた。

以上の仕事着の中で男女共にはいているハカマについて少し述べてみようと思う。

自家用の機織りは大正終わり頃までしていた。下市の紺屋で木綿糸を購入して、自家で織っていた（地織り）頃のハカマの縞柄は棒縞といって、紺地に茶色（鶯茶・こげ茶色）の一本筋（1本茶）であった。反物を買うようになってから、二本筋（コモチという）になったが、これらのたて縞柄の木綿布でハカマを作ったので袴縞と呼んだ。反物は、下市の呉服屋などで買った。

ハカマは、袴縞の木綿布1丈（鯨尺で378センチ）で作る。腰紐は、別に紺無地で、3～5尺の長さに作った。ハカマは前ゴシ（ハカマの前側）の方が後ろゴシより1寸短い。前丈は男物は2尺6～7寸、女物は2尺5寸である。男物は前ゴシの左に1寸5分程の穴をあける（人によって、右に開けた。ショウベン出しという）。前ゴシに9寸～1尺の膝当てを付ける。両脇のツバクラグチは、三角マチの残り布を使って縫って布を強くする。股部分にマチをつける。後ろゴシを裁った後の残り布でスネマチ・三角マチを取るときは、ホドライッコ（目分量）で計る。後ろゴシの先とスネマチを縫い合わせるときは縞を合わせる。

作り方は母親に習った。それでもわからないときは、仕立直しでほどいたときに合せてみたり、裏返しにしてみたりした。

ハカマは裾が細いので、モンペのようにばさばさしない。腰も紐で結ぶので体に合わせやすく、体を動かしやすかったという。山道を歩いたり、急斜面の多い畑などで前かがみになって働いたりすることの多い人々にとって便利であった。地元の人は単に「ハカマ」という。「黒滝袴」とはいわない。黒滝村の人が同じ袴縞のハカマをはいて下市に山の産物を運んできたり、買い物にきたりしている姿を見慣れた下市の人々が、ハカマの柄を見て黒滝村から来た人だとすぐわかるようになったという。そして、次第に黒滝村周辺の人がそのハカマを黒滝袴と呼ぶようになった。

今回は、黒滝村赤滝の杉本あいこさん（大正15年生）と福西マサエさん（大正3年生）には、まだ保存してあったハカマを見せていただくことができた。又、まだ3反袴縞の反物を残しておられた中戸の中辻ハルエさん（明治31年生）に布を提供していただいた。そして、中辻さんの家族と近所の喜田ノブ枝さん（明治41年生）に、反物を直線裁ちして布を無駄なく活用してハカマを作るところを見せていただいた。聞書に御協力いただいた方にここで感謝いたします。

今後もハカマにかかわる伝承を調査していきたいと思う。



▲黒滝袴

盂蘭盆における客棚習俗について

奥野義雄

□はじめに

現代の盂蘭盆における習俗には、古代あるいは中世の社会で醸成されてきたものが少なくない。ただ、古来からの習俗が今日まで伝承されてきているが、通常の祖先祭り（祖先祭祀）においてではなく、新仏を祀る所謂「初盆」「新盆」において古来の習俗伝承がみられるのである。たとえば、「燈籠進供」の習俗は、中世社会の公家や武家の間で、通常の盆における祖先の精霊に対して進み供えるものであった。この習俗が、後世になって民間では「初盆」への「燈籠進供」の習俗へと変わったと考えられる。

このように盂蘭盆の初盆における習俗には、興味を引くものがある。その一つに「客棚」の習俗がある。この「客棚」については、数人の研究者に注目されはじめつつある。しかし、現段階では「客棚」に関する関心もあまりみられず、その資料も数多く集積されていない。そのため、この習俗についての論稿はほとんどないようであるが、現今のお盆において「客棚」の習俗はいまだ聴き取りし得る状況であり、各地のこの種の習俗を聴き取って、資料の集積を図る必要があろう。また、この作業と併せて史料＝記録・文献の検出に努めることも必要といえよう。

したがって、ここでは大和に残る「客棚」習俗の若干例を挙げながら、盂蘭盆における「客棚」習俗の位置づけを試みていくことにしたい。

□大和の客棚習俗

大和・奈良県内の所謂「客棚」との出会いには、昭和59年8月のお盆（盂蘭盆）の時期であった。奈良市八島町の六斎念仏調査の折に同町内の一軒の講員の家で客棚が祀られていた。この客棚との出会いによって、客棚がお盆における関心事となった。八島町の客棚の例を含めて、次に若干調査した事例を挙げることにしよう。

事例1. 奈良市八島町の客棚

八島町のお盆（盂蘭盆）は8月13日

から15日まで営まれる。13日の午後には墓参りをすませて、夕刻に線香を焚いて祖先の精霊（オショライ）を迎える。また、15日の午前中に祖先の精霊を送るという。この期間中には、六斎念仏講中が町内の家に赴いて六斎念仏を唱える。町内の家を回るのは8月14日と15日であるが、とくに新仏の精霊（アラソソジョ）を祀る新盆（初盆）の家には8月13日に赴いて、六斎念仏を唱名する。新盆の家では、新仏のためにヤカタ（アラタナ、アランタナともいう）を仏壇のそばに設けて祀る。新盆の家と最も血縁の濃い者・近親者の家でもヤカタを設けて祀るが、新盆の家のヤカタより少し小さいヤカタが近親者の家で祀られる。地元では、このヤカタを「客棚（キャクダナ）」と呼んでいる。また、ヤカタや客棚は、20年か、30年程前から市販のものになったという。この八島町では、盆の期間中、「帰って来るオショライさんにいたずらをさせないように」とガキダナを設けて祀るという。※村内寺院は大念仏宗

事例2. 奈良市柳生のソトダナ

柳生のお盆は、8月13日から15日までの3日間で、13日の午後からタイマツを焚いて、家の前の道端で祖先の精霊（オショライさん）を迎える。また、15日も同様にして祖先の精霊を送る（近年タイマツではなく、線香を焚くところも増えてきたという）。新仏を祀る新盆の家でも新仏の精霊（アラソソジョ）を迎え・送る習俗は同じである。新仏のためにソトダナ（精霊棚）を8月13日の午前中に軒先か、軒縁に設ける。このソトダナは、新仏のある家で祀られる以外に新仏にとってもっとも身近な人もその家で新仏の精霊を祀る。祀り方は新盆の家と同様にソトダナを軒先に設ける（キャクダナとは呼ばず、

ソトダナと称する)。この柳生の村では、盆の期間中、ガキダナを設けてガキさん（ムエンボトケ、ムエンさん）を祀る。※村内寺院は真言宗

事例3. 奈良市水間のタナ

水間町のお盆は、8月13日から15日まで営まれる。13日の夕刻に家の近くの道端でタイマツを焚いて、祖先の精霊（オショライさん）を迎える。15日の午前中には、同様にして精霊を送る。新仏を祀る家では、13日の午前中にタナ（アラタナ）を作り、軒先に設ける。13日から15日まで祖先の精霊も新仏の精霊（アラソンジョ）も同じように祀られる。また、新仏に最も近い親戚・近親者の家でも、新仏のためにタナを設けて祀る。新仏のタナは箱状のものにスノコを敷いたもので、この壇上で祀るが、近親者の家のタナもこれと同様であるという。さらに、この村のお盆の習俗として興味をひくのは、村内でもまだ毎年祖先の精霊や新仏の精霊にかかわらず、軒先にタナを設けて祀るという習俗がある。あるいは、毎年ではないが、軒縁にタナをもうけて祖先や近親者の家の新仏の精霊を祀るところ（家）もあるという。このほかに、戸口に近いところにタナ（ガキダナ）を設けて祀る。※村内寺院は真言宗

事例4. 都祁村針のソトダナ

針の村のお盆は8月13日から15日まで行なわれる。13日の夕刻タイマツを焚いて祖先の精霊を迎える。また、15日の午前中に同様にして送る。新盆の家、つまり新仏を祀る家では、13日の午前中にソトダナを作り、軒先に設ける。そして、14日まで祀って、15日の朝にお寺に参って新仏のお盆の供養は終わるという。この新仏の家に最も近い親戚の家でもソトダナを設けて、近親者の新仏を祀る。ソトダナは、新盆の家も近親者の家のものも同じような形状で青竹を支柱にして桧の葉で側面や天井を覆ったものである（かつては、一般に県内各地でみられた所謂「アラ

タナ」と呼ばれているもの)。この村でソトダナと呼ばれている新仏のための棚は、その近親者が祀る棚と同じ名称で呼ばれている。また、この村のお盆の習俗には、盆の期間中、無縁仏を祀る棚は作らないという。つまり、ガキダナあるいはムエンダナは存在しないということである（ガキダナやムエンダナなど、という名称が地元ではわからなかった）。※村内寺院は真言宗

事例5. 都祁村南庄のソトダナ

南庄のお盆は、8月13日から15日まで行なわれる。13日の夜に祖先の精霊（オショライ）を家の戸口の両脇にムカエタイマツを焚いて迎える。また、15日の朝に祖先の精霊を送り、夕方には13日と同様にして、オクリタイマツを焚いて精霊を送る。13日の夕刻に祖先の精霊を迎えてから15日の朝に送るまで、精霊を迎え入れた仏壇に供え物やお茶湯（オチャトウ）などを供える。

一方、新盆の家では、桧の葉と青竹で作ったソトダナ（ヤカタとも呼ぶ）を軒縁に設けて祭壇を作り、新仏を迎える。このソトダナは13日の午前中に家の者（主に主人）が作る。新盆の家には、近親者からボントウロウが供えられる。この村では、新仏に最も身近な親戚が新仏を、新盆の家と同様にして、軒縁にソトダナを作り、新仏を迎えて祀る。新仏の家と近親者の家とも、新仏を新盆に祀る祭壇は「ソトダナ」と呼ばれている。※村内寺院は真言宗

以上が、お盆における所謂「客棚（キャクダナ）」習俗の調査事例であるが、各調査地で聴き取った同様な習俗事例の村・町として、山添村室津（ソトダナ）、都祁村白石（ソトダナ）が挙げられる。ただ、その習俗を直接に聴き取りしていないため、ここでは十分な事例として提示し得ない。さらに、奈良県内に事例の提示を絞ったので、県外のお盆の所謂「客棚」習俗については省略したが、大阪府箕面市域においてもこの「客棚」習俗があることを明示しておきたい（同市域の各村・町ともに「ソトダナ」と呼ぶ。箕面市白島、

萱野などにこの習俗がみられが、新仏の家の「ソトダナ」という呼び名だけでは区別できないようである。これらの地域のお盆における客棚習俗については、別の機会にお盆の習俗全般として記したい)。

さらに、高谷重夫「もらいまつり一盆行事の一問題」(『日本民俗学』第174号所収)において、すでに所謂「客棚」習俗について行論されているところによると、和歌山県内(8事例)、奈良県内(20事例)、大阪府下(1事例)の調査事例を提示されている。また、平山敏治郎編『大和国無足人日記』にみえる元禄十二(1699)年七月十四日の条の文言を挙げられて、近世に奈良市田原の村に客棚習俗が存在していたことも併せて明示されている。ただ、同氏の提示以外にも同『日記』には、毎年のごとく新仏にかかわる客棚を祀る習俗が記述されているのである。たとえば、元禄五(1692)年七月十四日の条を見ると、「聖霊祭如常 亡妻貞意為新霊也。又山岡氏亡妻教春・善右衛門・市助父・梅原氏妾関女等、各新霊祭之」とあり、親類縁者の新仏を祀っていたことが窺える。また併せて宝永二(1705)年七月十四日の条を繙くと、「聖霊祭如例。其内梅原儀右衛門武旨新霊也(割註略)」とあり、「聖霊祭」の文言のなかに新仏を祀る習俗が含まれていたこともわかる。

したがって、同『日記』を見るかぎり、この地(奈良市田原地区)の祖先祭祀習俗に客棚を祀る習俗があったことになろう(詳細については、高谷論文および『大和無足人日記』を繙読されたい。また、柳田国男『歳時習俗語彙』などにも見られるので参照されたい。さらに、高谷論文にも行論されているように所謂「客棚」の習俗は、奈良、大阪、和歌山などの地域のみが存在する習俗ではなく、限定された地域以外にもあると考えられる。このように想定し得るならば、お盆における「客棚」習俗の伝承資料の掘り起こしを行なう必要があると思われる)。

ただ、この習俗での関心事は、すでに提示されているが、江戸時代には「客棚」習俗があったことである。そして、この習俗が江戸時代以前にも存在していたのか、否かということに関心が注がれるのである。このことに

ついては、別の機会に若干検討していきたい。

□「客棚」習俗の課題について

すでに『大和無足人日記』に所謂「客棚」の習俗の存在が提示されているが、この近世史料一件では、例外的な記載としてしか捉えられないかもしれない。この点についても今後考えていかなばならない課題であろう。

そして、近世史料およびそれ以前の文献史料を繙いて、近代以前の「客棚」という概念(キヤクダナ、ソトダナ、モライダナやオモライサマ、オキヤクボトケなどと称されるもの)で把握し得る習俗の存否も、今後検討していく必要があるだろう。

いいかえると、お盆における「客棚」習俗が、いつ頃から醸成し、民間に受け入れられていったのか、ということを究明することも一課題となろう。このことは、所謂「客棚」習俗の歴史の変遷を知るためにも必要なことであろう。また、視点をかえれば、お盆の習俗それ自体の変遷の理解にも結び付くものと考えられる。

さらに、高谷論文で指摘されている「客棚(キヤクダナ)」と「餓鬼棚(ガキダナ)」「無縁棚(ムエンダナ)」とのかかわりについても、今後の課題として検討していかなばならないであろう。この課題の検討によって従来から諸先学が論じてきた百味御食を供えることが、お盆(盂蘭盆)の本来の意味であるとする論旨とどのように結び付いていくのかも大方理解し得るようになるのではと想定している。

このようにお盆における「客棚」の習俗は単にその習俗の理解を深めていくのみではなく、お盆の習俗自体の在り方についても考えさせてくれるものである。しかし、従来より余り顧みられなかったか、断片的にしか表面上に現れなかったのかは明確にしがたいが、「客棚」の習俗の解明は、これからの調査にかかわっていると考えられる。そして、ここで推察がゆるされるならば、所謂「客棚」の習俗は現段階で提示されている地域=近畿のみではなく、かなり広範囲にわたって行なわれていた(あるいは行なわれている)習俗であるのでは、と考えられる。

(1991. 2. 25日)



16 茅葺屋根とその伝承(1) 横山 浩子

大和民俗公園では、平成3年度事業で旧八重川家住宅主屋（旧所在地：山辺郡都祁村針、八重川政次氏寄贈）の復原を行なった。文化財の保存を目的として行なわれる民家の復原はまた、今日一般にはほとんど見るのできなくなった伝統的工法、技術の再現の場ともなり、さらにはその技術の保存・継承にも軽からぬ意味を持つようになってきている。今回その中から茅葺屋根に関わる技術をビデオに収録し、またその職人（屋根屋）さんのお話をうかがうことが出来た。ここに、その概要を報告したいと思う。

（調査協力者）

隅田隆蔵氏（大15・5・8生）宇陀郡大宇陀町大熊

隅田 茂氏（昭34・10・22生）

道上照治氏（昭2・9・20生）和歌山県有田郡金屋町瀬井

隅田隆蔵氏は、同じ大熊に住む東谷庄治氏（隆蔵氏の叔父）について16歳から屋根葺を始めた。近在（口宇陀・口吉野）での仕事の他、榛原町自明、菟田野町平井、大宇陀町大熊、同本郷の職人十数人で組織された「自明組」の一員として奥宇陀（曾爾村、御杖村）方面にも出掛けた。この両地域には屋根の葺材、葺き方他、屋根葺の習俗にかなりの違いがみられた。^(註1)前者の葺材は稲藁、小麦稈であり、^(註2)総葺替（ゴロブキ）をすることはめったになく、痛んだ面、或いは痛んだ箇所を葺くだけの材料がその家にストックできたら、順次葺替えていくシステムであるのに対して、後者の葺材は茅で、勿論部分修理もあるが、約30年に一度（立地条件他諸条件によりそのサイクルには幅がある）総葺替が行なわれ、共同体で茅場を管理し、タノモシや手伝いなど葺替の相互扶助を行なうシステム（ユイ）が堅固に守られていたようである。

屋根葺の仕事は、農家の副業として主に農閑期に行なわれていたものであるが、それぞれの地域、葺材によって葺く時期が異なる。奥宇陀方面には12月15日頃から2月半ばの梅の季節まで泊まり掛けで出掛ける。春先になると茅が乾いて滑りやすくなり、葺きにくい

ものだという。以降は各々の地元での仕事となるが、春は稲藁葺、初夏の小麦の収穫時期以降は麦稈葺が多かった。地元での仕事は、個々の職人の直接請負で行なわれ、2、3人でかかって藁葺なら5日、麦稈でも一週間もかかれば大仕事で、3～4日で仕上げてしまうのが普通である。

奥宇陀の仕事は自明組として請負い、その親方が元締めとなって日程、賃金、人の手配などの段取を組む。この地域には地元「肝煎」とよばれる世話方がおり、その年に何処と何処が屋根葺をする、という情報もそこに行けばわかる。この肝煎の仲介によって親方は仕事の請負（「ウケトリ」という）の際にも一緒にその家に出向いて仕事をきめる。請負の金額として「カラス何本でいくら」というような屋根の大きさを測る目安もあるが、それよりどの家にも過去に葺替をしたときの茅や縄など材料の量、職人に支払った賃金等が事細かに記録されていて、これが交渉の際にも基準とされた。

なお、この地域を地盤とする屋根屋の集団として他に「菅野組」（御杖村菅野を中心とした組）があったが、使う道具の形（例えばコテ）や葺き方に少し違いがあったという。

以下奥宇陀地方で行なわれた茅葺の事例を中心に述べる。

屋根葺が行なわれる家ではいうまでもなく実際の生活が営まれているので、出来る限り早く葺き上げなければならない。畳まで全部上げて準備しているが、今と違ってシートなど覆うものもないから雨曝ともなる。

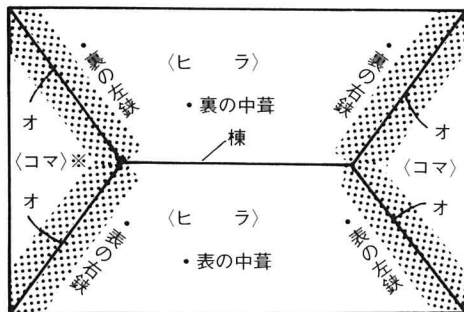
総葺替の場合、屋根の四面の中葺（平面部分を葺く人）に8人、ハタ（屋根の角＝オの部分）4ヶ所に各1人づつの計12人で仕事をするのが一番効率が良い。屋根の大きさや、庇つきと葺おろしとで多少の違いもあるが、これで5日程で葺き上げるという。仕事にかかれば、お互いに助け合うことはなく、むしろ競争で行なった。遅れを取れば、例えば葺上げの最後など茅が向こう面のものと重なって

それだけやりにくくなる。

仕事の場所分担は、技術の熟練度によって決まる。ハタを葺く人はオドリコとよばれるが、これは中葺より難しく、年季がいる。また鉾をかける位置も、中よりオの部分、オどうしでも右鉾（ヒラに向かって左を刈る人）と左鉾（同じく右を刈る人）では、作業姿勢が逆手となる左鉾のほうが難しい。表の左鉾は最も腕のたつ職人が務める。

屋根葺には、三隣亡にツノムスビしてはならん、という禁忌があり（口宇陀・口吉野方面では聞かない）、この日には鉾をかける手順に入れるよう逆算、調整して日程をきめた。どうしても日が合わないときには「三隣亡の神サン」といって施主が近所の人に頼み、朝一番に、腰蓑を着け、顔に墨を塗りたくった姿で家に入ってもらい、その間終始無口のままで用意されたお膳を食べ、そのまま帰ると「三隣亡の神サンが出ていった」といって早速屋根葺にかかる、ということもあった。

また奥宇陀地方では、棟飾りが終わると「棟マツリ」を行なった。各村毎で、そのやり方には多少の違いもあると思うが一例を挙げると、まず出来上がった棟の上に職人が並び、棟の真中に御幣を立て、また同じく中央のカラスの背に鎌を2丁並べて立てる。足付膳に洗米1升3合、小豆3粒をのせ山海の幸も取り合わせて供え、棟梁（親方）が各カラスに御神酒をかけた後、職人も一口づついただく。立てた御幣はそのままにし、長く残っているほうが縁起がよいと喜ばれた。次にカラスの数だけ作った白木板の膳の上に粳の団子（シラムシ）をこれまたカラスの数づつ盛ったものを作り、これを荒縄で屋根の上の職人と下に集まった手伝いが引っ張り合いをすること



※コマ＝ツマのこと
▲入口
〈屋根の部分と作業場所の名称〉

が行なわれる。^(註3)互いに押問答をして根負けした方（普通は職人の方）から歌を一節歌う（歌う間縄を揺りながら）。すると6尺程だけ縄が引き上げられ、互いに3回位づつ歌の掛け合いをしながらこれを上まで引き上げ、また裏に引き下ろすという作法があった。これを職人達は「ウタイアゲ」とよび、また手伝いの人達は「オモシロヤ」といった。歌詞は次のようなものである。

○ここのうらやに井戸掘初めて ーへ

水が湧かずに金がわく オモシロヤー

○ここのうらやに茗荷^{みょうが}と落^{ふき}と ーへ

茗荷めでたや落繁盛 オモシロヤー

○ここの旦那は団子か餅か ーへ

餅はもちでも金持ちや オモシロヤー

また、この日のシラムシを屋根屋が自ら作った藁^{わら}のホデ^{わらずと}（藁苞）のなかに入れたものは「祝ノ餅」といい、これを妊婦が食べると安産できるといって喜ばれ、施主の身内や手伝いによく頼まれたものである。

屋根葺が完了することを「フキオロシ」といい、この日は施主が手伝いや身内を招待して、祝いの膳が出される。多い場合には60人もの人が昼と夜に分けて招かれた例もあった。職人達にも別席が設けられた。席次は正座に棟梁（親方）、その右隣に表の左鉾、左隣が裏の左鉾、その左右の下にそれぞれ表の右鉾、裏の左鉾、表の中葺、裏の中葺という順序に座ることにきまっていた。

さて、屋根屋職人の仕事先での衣・食・住について少し触れておこう。

仕事着は時代により移り変わりがみられるが、昔はジバンに紺のハンチャ、紺バッチといういでたちで、隆蔵氏の親方はハラアテも着ていた。これに黒の腕抜きをつけ、草履ばき、真冬にはこれに刺し子の足袋をはく。奥宇陀地方では屋根屋のために新しい草履を夜なべで編^あんで用意してくれていたものだという。

腕抜きは「ジゴクブクロ」などともいった。これを一端はめたら「どうでもこうでも仕事せならん」からだという。腕抜きをしていても小麦稈や稲藁葺でハリ（針）を使わず、腕を直接突っ込んで縄取りをするときや、また差し茅（ヌキサゲ）の作業で茅を引っ張り

出すときなどに手を傷つけることも多く、風呂に入るのもつらかった。

昔はカマドを焚いたので屋根は煤だらけだったから、作業をするときは手拭いで「鼻ホウカムリ」ということをした。このほか鉢巻をする人もおり、向こう鉢巻、ネジリ鉢巻、また独特の巻き方をしてダテを競うふうもあったようである。

仕事以外のとき着るのを「しまい着」といって、アツシを着た。

これらと下着一式を藤^{とう}の行李に詰め、鎌・コテ・ハリといった道具をひとまとめにして行李に括りつけて（これを「カツツケにするという）担いだ。また近くに出掛けるときは風呂敷を用い、同様に道具類の先に括って出掛け、荷物は日帰りならばその家の玄関のコエンに置き、泊まるときはこれを奥の間の枕元に持って入った。



▲鼻ホウカムリ

奥宇陀地方での仕事では食事は日に4度出て、手伝いの分も含めて施主持ちとなるが、鍋のタノモシというのもあって、手伝いがそれぞれ一鍋、二鍋と煮しめなどを持ち寄り、まかなっていた。

泊まるのは施主の家の他、2、3組に分かれて近所や親戚に宿を取る。葺いている最中の家屋に泊まらなければならないこともあったが、雨が降ると場所を移さなくてはならなかったから嫌がられた。

× × ×

以上、昔の屋根葺やその職人の様子について、隅田隆蔵氏の経験談を中心にその一端を紹介したところで紙面が尽きてしまった。屋根葺は本来、単に職人達だけにゆだねられたものではなく、家や共同体が主体的に関わるシステムによって支えられてきた。まさに生活の中に根づいた技術ということが出来る。次稿では茅葺作業の実際、またそこに使われる道具について報告する。

(註1) 県下では、草葺のことをクズヤ葺とよぶ。

(註2) ただし、小麦藁はカブを下向きにする（茅も同様）本葺であるが稲藁葺は逆葺（スエを下に向ける）にする。逆葺は葺材の量も少なくて済み、早く葺けるが、耐久力は本葺きより劣る。稲藁葺では3年程で痛みが出てくるという（隅田茂氏談）。

(註3) 勝は緑高のような形で重ねられ（一番上は蓋付）縄で十字掛けにしてひとくりにされる。なお、ウタイアゲの後、屋根の上から餅撒きが行なわれるが、これはシラムシではなく、餅米を搗いたものである。

なお、当博物館だよりVol. XI No.4、Vol. XII No.3（昭和59、60）に長谷川晋平氏の「屋根について」という報告があり、本調査にあたっての参考とさせていただいた。

お 知 ら せ

〈収蔵品展〉「吉野のくらし」

平成4年1月5日→8月30日

〔表紙写真〕

吉野の山村は山ふところの斜面に人家が点在し、その周囲は畑であり、畑の周囲は杉、桧の山という景観である。（写真は川上村教育委員会提供）

〈常設展〉「大和の生業」

■大和の農村のくらし

稲作コーナー

大和のお茶コーナー

■大和の山村のくらし

山の仕事コーナー

観覧料金改定（平成4年4月1日）

	大人	学生	小人
個人	200円	150円	70円
団体	150円	100円	50円

（20名以上）

※入園および民家見学は無料

開館時間 館内 午前9時～午後5時

（ただし入館は4時30分まで）

民家 午前9時～午後4時

（博物館および民家の見学所要時間は約1時間30分）

休館日 毎週月曜日

（その日が休日のときは翌日）

但し、平成4年5月4日、5日開館 5月6日休館